

## 白神古道トレッキング

文筆家 根深 誠

白神山地にはいくつかの古道が存在します。白神山地という名称をこの地域の山並が獲得する以前、遙かな昔から道は山中に続いていました。どれくらいの昔から、だれがなんの目的でその道をつくり、あるいは利用したのか。こうした疑問は私たちの想像力を掻き立てます。

それは山の利用と多いに関係があるようです。時代の変遷に伴い、同じ一本の道でも、さまざまな目的で利用されてきました。文献にも見られるように、鉱山や薪炭材供給の流木山として山が利用された時代もありました。

しかし、それだけではありません。もしかしたら縄文人が狩猟・漁撈・採集の目的でたどった道かもしれません。現在、砂子瀬・川原平地区で縄文遺跡が発掘されている事実からすれば、これはあながち荒唐無稽の推理でもなさそうです。

古道には土地の歴史や文化が刻まれ、時代の価値観や利用目的が映し出されています。さしずめ現代はなんの目的で山を利用し、道をたどっているのでしょうか。観光でしょうか、それとも調査研究体験学習でしょうか、あるいは健康増進でしょうか。その古道をたどり、歴史や文化をふまえて、さまざまに思いを馳せながら山歩きをすることは私たちの心を豊かにし、かつ地域社会の再生にもつながる道ではないでしょうか。

40数年におよぶ私の白神フィールドワークの

中から、白神古道の代表的な3つの事例を、ここにほんの一部ですが紹介しましょう。トレッキングの参考にしてください。



### その1、暗門の滝

#### ＝菅江真澄のたどった杣道＝

江戸時代後期の遊歴文人・菅江真澄は津軽地方に6年あまり滞在し、この間に現在の西目屋村には3度足を踏み入れています。寛政8年、9年、10年のことですが、このうち8年と10年には暗門の滝を探訪しました。

菅江真澄はどこを歩いて暗門の滝へ行ったのでしょうか。暗門川沿いの現在のような観光目的の遊歩道はもちろんありませんでした。暗門川は上流地帯に岩場が多く、そして地形も険しく、このため降雨時には急激に増水するので危険視されていました。いまでも雨が降るたびに遊歩道の通行が禁止になるのは、そうしたことを物語っています。

菅江真澄の紀行文には、たどったコースを推理するためのヒントがいくつか書き記されています。それと同時に、暗門の上流域一帯の流木山で働いていたヤマゴ（杣人）の様子も描かれています。探訪したのは寛政8年のときは冬、10年のときは初夏の季節ですが、たどったコースは同じではないようです。というのは、初夏のころは沢筋や斜面を横切ることができますが、冬は

雪崩などの危険から尾根筋以外にコースは考えられないからです。

それでは『菅江真澄遊覧記3』（内田武志・宮本常一編訳・東洋文庫）からヒントになる箇所を抜粋してみましょう。紀行は8年のときが『雪のもろ滝』、10年のときが『外浜奇勝（三）』に述べられています。まず前者『雪のもろ滝』から列挙しましょう。

「柴倉が岳という山を仰ぎみると、たいそう高い。木々がなほふかく茂りたっている山の麓で、折れふしている枯柴に腰かけて、弁当箱をひらいた」「さらに奥山ふかくはいり、岡市・籠の沢におりていった。この沢水と、ふかけの沢という山川をわたる」「案内をたよりに、きのうわけいった山々をたどりたどって、かろうじて鬼川辺というところにでた」

ここでのキーワードは「柴倉が岳」「岡市・籠の沢」「ふかけの沢」「鬼川辺」で、これらは現存する山名、沢名です。次に後者『外浜奇勝（三）』から列挙しましょう。

「鬼川辺のほとりに住み捨てた木こり小屋があるのにはいった」「柴倉山の麓まぢかくわけゆくと、むかし採掘したものであろう、かなしき（鉱坑）のあるほとりにこぶし拳のような玉霊斤（石膏）

があった。枝折の道には牝桂（カツラ）がかおり、冷翠金剛（ハクサンシャクナゲ）の花が咲いている岩根の小坂」「おかいちこの沢にくだり、諸滝もろの上方からはるばる見下すと」「鬼川辺の主もない宿にふたたび泊まった」

ここでのキーワードは「鬼川辺」「柴倉山」「鉱坑」「カツラ」「ハクサンシャクナゲ」「おかいちこの沢」「鬼川辺」で、前者に記述された山名、沢名のほかに鉱山跡地や樹木名も出てきます。

詳述する紙幅がないのは残念ですが、伝承や実地踏査、さらに紀行文の記述から総合的に類推すると、鬼川辺の取り付き点は8年のときも10年のときも同じ場所です。尾根の末端の川原にサワグルミ林があり、いまでも容易に確認できます。最初のときは冬なので尾根筋を通して「柴倉が岳」、これは「柴倉山」と同じ峰を指しますが、その峰を越えて妙師崎沢に下降したのでしょう。「岡市・籠の沢」「おかいちこの沢」は現在の妙師崎沢に該当します。

二度目のときは「柴倉が岳」には登らずに、その南斜面に食い込んでいる柴倉沢を横切って尾根を越えて妙師崎沢に下るコースをたどったものと思われます。

このコースは妙師崎沢に小屋掛けしてゼンマ



1. 柴倉鉱山の鉱坑入口



2. カツラの巨木

イ採集で近年まで生活していた人たちに利用されてきました。鉱坑は記述と同じ場所ではないかもしれないけれど、現在もあります(写真1)。昔から道しるべになっていたというカツラの巨木(写真2)もあります。おそらく菅江真澄の紀行文に記されたカツラではないでしょうか。

## その2、県境を越える杣道

岩木川の源流・大川の上部は地形が険阻であることから秋田の猟師たちの間では「津軽の箱」と呼ばれ、そこへ逃げ込んだ獲物は深追いしない、という慣わしになっていました。この大川の支流に大滝股沢があります。途中に「石滝」と呼ばれる、巨岩が累々と積み重なった大きな滝があるのですが、滝の落ち口まで、右岸の斜面に道が続いています。

多くの人たちが、この道を通って秋田の鉱山へ出稼ぎに行きました。鉱山は粕毛川にありました。夫が炭塵で胸を患い、迎えに行った婦人もいました。中には能代まで物見遊山に出かけた人もいました。ほかにも狩猟・採集の人たちに道は利用され、それらの記録が沿道の随所に見られます。

鉱山は秋田だけでなく、津軽側の県境直下にもありました。時代はさだかではありませんが、そこには「かねすりうす金研臼」があると言いつたされています。ただし、発見した人はいないようです。鉱山の遺物と思われる六角柱の石材が最近になって発見されました(写真3)。

この道は「石滝」から上流は沢伝いですが、県境までの間に滝が3ヶ所にあります。いまでも巻き道がかすかに残っています。その巻き道を通して、昔の山人たちが男女を問わず滝を越えて往来していた事実は、私たち現代人にとって

驚嘆すべきことです。

県境稜線から小岳に登った人もいます。小岳にはハイマツが群生し、そこからは白神山地の重畳と続く山並みを一望のうちに収めることができます。



3. 大滝股沢の奥地で発見した石材(撮影:小島一郎)

## その3、尾太街道 =牛道=

尾太鉱山の鉱石を弘前へ運んだ尾太街道は、それが牛の背に積まれていたことから「牛道」と呼ばれていました。いまでも村の古老には知っている方がいるかもしれません。

現在、湯の沢川の左岸にその痕跡を認めることができます。道は湯の沢川から山越えして平沢川の「七ツ滝」の上流を通して相馬の作沢川に抜けているのですが、付近一帯はスギの造林地と化してしまい、いまでは痕跡をたどることすら不可能な状態です。

この牛道と尾太鉱山に関する詳細については『山機録』という古文書に述べられています。明和7年と8年に書かれた記録ですが、著者の竹内勘六が安永5年(1776年)に寄進した一對の御神燈籠が村市村毘沙門堂の境内にあります(写真4)。

この毘沙門堂にはもう一對、竹内勘六以前の



4. 村市村毘沙門堂の石燈籠



5. 作沢川(小倉街道)沿いの岩屋不動尊と石燈籠

尾太銅山司・津国屋籐八が享保6年(1721年)に寄進した石燈籠も並んであります(写真4)。

さらに尾太銅山司の石燈籠に関していえば、安永4年(1775年)に三上兵助が寄進したものが尾太岳の山頂と作沢川沿いの岩屋不動尊にあります(写真5)。前者2人にくらべて三上兵助の素性は、いまのところ調査不足で不明です。

牛道は『山機録』に記されたもの以外にもありました。享保7年に津国屋籐八が藩から、この道の使用を許可されたと伝えられています(註)。

この道は、ブナの幹に碍子が打たれていることからして電線を引いたのだろうか、近年まで利用されていたことがわかります(写真6)。下駄履きで歩いたことのある人もいます。また途中



6. 晩秋の牛道と尾太岳とブナの二次林

には鉱石も落ちており、往時を偲ぶよすがとなっています。この道を利用して、湯の沢川を挟んで尾太岳の対岸にある陣場岳に登ることができます。

(註)『目屋村のあゆみ』(三上源四郎著)

## 白神山地ビジターセンター

【開館時間】 9:00~16:30 大型映像上映時刻(10:00・11:20・13:00・14:10・15:20 ※上映時間約30分)

【休館日】 (1) 4月~12月 第2月曜日(祝日の場合は翌日)  
(2) 1月~3月 毎週月曜日と木曜日(祝日の場合は翌日)  
(3) 年末年始 12月29日~1月3日

【入館料等】 入館は無料 映像観覧は有料 ●一般 200円 ●小・中学校 100円 ※団体割引(20人以上)

〒036-1411 青森県中津軽郡西目屋村大字田代字神田61-1

Tel: 0172-85-2810 Fax: 0172-85-2833

ホームページ <http://www.shirakami-visitor.jp/>

※42名まで収容できる会議室、工作室があります。ご利用下さい。(要申込み)

※学校の見学や体験学習については相談をうけています。ご連絡下さい。